2013年8月

第16号

編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7+（セブンプラス）

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をご覧ください。

①華麗なデュエットで観客を魅了
― フクロテナガザル ―

正門から入ると、響き渡る大きな鳴き声に迎えられることがあります。声の主は、テナガザルの仲間では最大で、マレー半島南部やスマトラ島の森にすむフクロテナガザル。類人猿なので尾はなく、足より長い腕でスイングしながら枝から枝へ移動。足も手のように枝を握ることができ、食べ物を足でつかんで口に運ぶこともあります。

大きくふくらむのど袋で共鳴増幅させる大音量の鳴き声は、縄張りの主張と群れのコミュニケーションのため。当園のペアは、多い日では 6～8 回、メスが主旋律を奏で、オスが合いの手を入れてかけ合いとなり、次第にテンポを速めて二重唱のクライマックスへとのぼりつめます。鳴きながら鉄棒をハイスピードの腕わたりで跳び回り、調子が出ると鉄棒の上を立って走ることも。鳴き声は 2～3ｋｍ先まで届き、天候により都賀駅付近でも聞こえるそうです。

②ごあいさつの練習中
― カリフォルニアアシカ ―

カリフォルニアアシカは、北アメリカの西海岸に分布し、オス１頭とメス数頭および子どもたちでファミリー（ハーレム）を作ります。繁殖地はサンフランシスコ以南、カリフォルニア半島先端までの小島など。

当園では、ひときわ大きな体をしているのが 27 歳になるオスのドン。ハワイ生まれで 300 kgを超える立派な体格をしています。おでこにあるコブが立派なオスの印です。一番小さなマリンは、2008 年大阪生まれのメスで、黒っぽい体。水槽越しににらめっこをしているのは多分マリンです。今、飼育係さんとトレーニングのまっ最中。10：30 からの食事時間に健康チェックをかねたあいさつや握手の練習をしています。ぜひ特訓の成果を見に来てください。

③苦難の歴史をのりこえてきた
― アメリカバイソン ―

アメリカでは「バッファロー」とも呼ばれている、草原にすむ野生の牛の仲間で、体重は 350 kgから 800 kgもある大きな体。肩が盛り上がって、いかにも力が強そうです。

かつては北アメリカの広い地域にたくさんいて、農耕をしない先住民にとっての大切な食糧でしたが、ヨーロッパから移住してきた人たちに狩猟の対象にされてしまい、19 世紀初めには数千万頭いたのが、19 世紀末には数百頭にまで激減しました。アメリカ映画「ダンス・ウィズ・ウルブス」に、そのあたりの事情が描かれています。現在ではアメリカの国立公園などに保護されていて、数万頭にまで数を回復しています。

当園にはオスのターバンとメスのヒートがなかよく暮らしています。夏と冬では毛のようすがだいぶちがうので、今度は冬に、また見に来てくださいね。

④アマゾンでスローライフを楽しむ
― フタユビナマケモノ ―

ナマケモノは中央アメリカから南アメリカの熱帯雨林にすむ、とても変わった動物です。鉄棒の「ぶたの丸焼き」みたいなかっこうで木にぶらさがって過ごし、木の葉や実を食べ、週に１回くらい地面におりて、オシッコとウンチをしたらまた木にのぼります。

当園ではバードホールでフタユビナマケモノを飼育していますが、今年６月初めに赤ちゃんがお母さんから離れて落ちているのを発見。現在、人工哺育で育てています。2008 年にも、同じようにこどもを人工哺育で育て上げた実績があり、これが２例目。赤ちゃんもたまにまとめて排泄するので、そのあとは体重がめっきり減ってしまい、順調に発育しているかどうかわかりにくいそうです。無事に育てば、近くで見られる機会もあるでしょう。ご期待ください。

⑤むかしばなしでおなじみの
― ニホンキジ ―

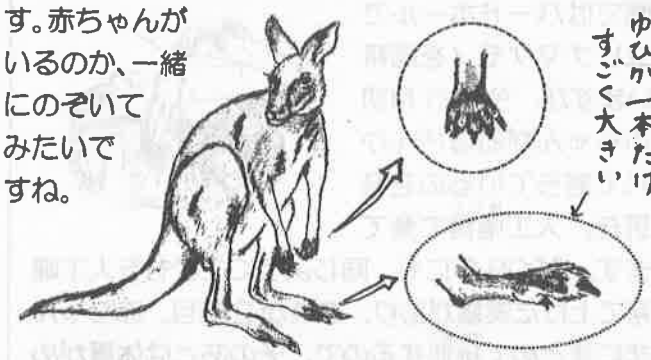
キジは、1984年から2007年発行の1万円札のうらにも描かれていた日本の国鳥で、桃太郎の家来としても登場することから、日本人にとって一番なじみ深い野鳥と言えるでしょう。オスは、目の周りの赤い肉垂と青い首、長い尾が特徴で、胸から足元にいたる黒っぽい羽根は見る角度によって緑や紫に輝きとてもきれいです。オスは繁殖期には縄張りを持ち、ケッケーンと言う鳴き声の後にドドドドッと羽を打ちつけて音を出す「ほろ打ち」と呼ばれる動作をくり返し、自身の存在を遠くのメスたちにアピールします。メスはオスの縄張りを順にめぐり気に入ったオスと交尾。抱卵、子育ては、メスのみで行います。

⑥ダイナミックな両足とび
― オオカンガルー ―

片方のひじをついて横になり、手で脇腹をポリポリかいたりする姿が、人間くさくて愉快なカンガルー。その体の仕組みや生態は、とてもユニークです。

筋肉の発達した大きい後ろ足には指が4本しかなく、くすり指だけが極端に大きくなっています。オーストラリアの大草原を速く走るために進化した体です。オス同士のけんかでは、しっぽで体を支えて後ろ足でキック！ 人にも向かってくるので、飼育係さんも不用意に近づくことはできないそうです。

小さい前足には5本の指があり、エサを持って食べることもでき、「手」の役割をします。メスはときどき手で自分のおなかの袋を開けて中をのぞき込んでいます。赤ちゃんがいるのか、一緒にのぞいてみたいですね。



★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

獣医さんのしごと

当園には3人の獣医さんが勤務しています。そのうちの一人、宮﨑沙都さんに聞きました。

―動物たちのケガや病気の手当のほかに、動物園ならではの獣医さんのしごとはなんですか？

○**検疫**　新しく入ってきた動物を、数週間隔離して健康状態を観察します。なにか病気をもっていて、ほかの動物にうつることがないようにするためです。

○**病気の予防**　動物の種類によってかかりやすい病気がちがうので、それぞれ必要に応じてワクチンを打つなどします。国内で動物にかかる伝染病が流行しているときなどは、リスクに合わせた対策をとります。

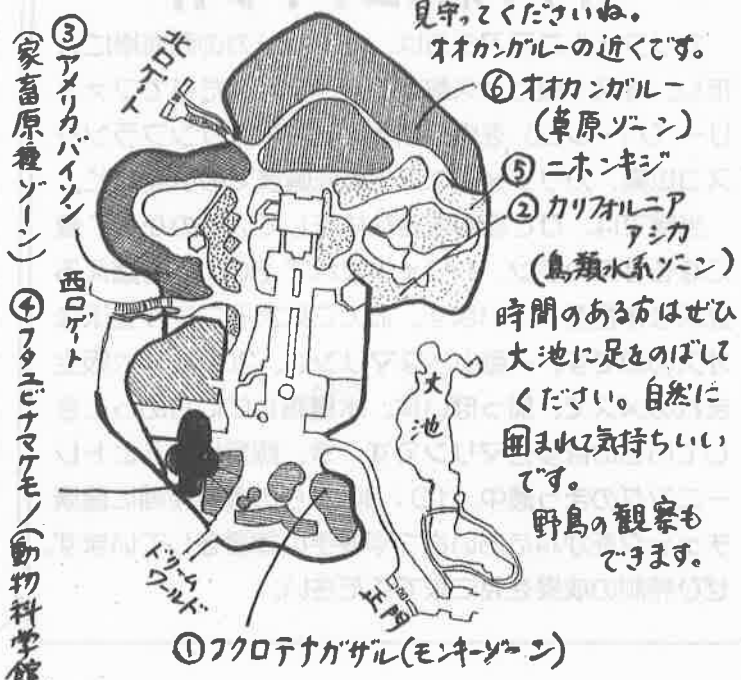
○**衛生管理**　病原菌を外から持ち込まないよう、バックヤードに靴底の消毒液を設置するなども、獣医の仕事です。

―心がけていることはなんですか？

多くの動物たちの健康状態を観察するには、十分な時間が必要です。普段よく動物を見ている飼育担当者との会話から情報を得ることも多いので、飼育担当者とのコミュニケーションを大切にしています。それによって異常に早く気づけるようにしたいと思います。

★ボランティアが毎月第2、第4日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイドをしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

7月19日にベニイロフラミンゴのひなが生まれました。
小さな体に長い足？ 両親が子育てをがんばっています。
見守ってくださいね。
オオカンガルーの近くです。



第17号
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7+

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

①お父さんはイクメン！
― ベニイロフラミンゴ ―

7月19日、ベニイロフラミンゴに待望のひなが生まれました。生まれたときは灰色っぽい綿羽におおわれていますが、成長するにつれて白ピンク、ピンクと徐々に変化します。あざやかなピンク色になるまでに3年くらいかかるそうです。

生まれて数か月は両親から、フラミンゴミルクという素嚢からでる栄養豊富な分泌液をもらって成長します。飼育員さんの話では、特にお父さんが育児熱心で、まわりのフラミンゴにちょっかいをだされないようひなのそばを離れず、またピンク色の色素が豊富なフラミンゴミルクをたくさん与えたせいで、お父さん自身はすっかり色が白くなってしまったそうです。

フラミンゴのペアが温める卵は一個だけ。イクメンになるのもうなずけますね。

②「だれがきたかな？」と　こっちを見る
― コモンマーモセット ―

マーモセットは、南米に住む小型のサルの仲間です。家族の群れをつくり、長い尾を器用に使って、木の上でくらしています。当園でのエサは細かくきざんだバナナ、オレンジ、リンゴ、ふかしイモ、ふかしニンジンなどと、コオロギ、ミルワームなどの昆虫類です。好奇心がおうせいで、小首をかしげてこちらをうかがう様子はとってもかわいいです❤

コモンマーモセットは、耳にふさふさした白い毛がはえているのが特徴。ならんで展示されているシロガオマーモセット、クロミミマーモセットなどは、コモンマーモセットに近い仲間です。見くらべてみるのも楽しいかもしれませんね。

★ボランティアが毎月第2、第4日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイドをしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

③引くのはサンタのそりだけじゃない
― トナカイ ―

シカの仲間で唯一、オスもメスもツノがあるトナカイ。大きなツノは、毎年抜け落ちて生え変わります。ヨーロッパ、アジア、北アメリカの、北極に近い地域に生息し、北米ではカリブーと呼ばれます。雪や氷の上も安定して歩ける幅の広いひづめを持ち、そのひづめで雪を掘って地表のコケやキノコを食べたり、木の葉などを食べます。古くから家畜として飼われ、毛皮、肉、乳が利用されるほか、そりを引いたり、背中に人を乗せることも。

当園にはオスとメスの2頭がいますが、とくにオスは発情期には気が荒くなり、飼育員さんも近づくのは要注意で、そりは引いてくれそうもありません。

④さむいのは苦手なペンギン
― ケープペンギン ―

別名アフリカンペンギンとも呼ばれ、ケープタウン周辺に生息しています。特徴は目の上の太い白線と、胸に黒の1本線。カップルは通常一生同じ相手と暮らし、卵は1度に1～2個生み、オスとメスが交代で1ヶ月ちょっと温めます。

当園では、エサは小あじを与えています。昨冬生まれた子ペンギンは青灰色のぼかし模様。88年生まれで25歳の長寿ペンギンは動きがゆったり、寝ていることもしばしばです。探してみてくださいね。

泳いでいるときは、下の通路から水の中の様子も見られます。ペンギンの骨は他の鳥類と違って密度が高く重くできていて、潜水しやすくなっているそうです。口ばしにも特徴があるので、近くに泳いできたら観察してみてね。

⑤極上の毛皮を持つネズミ
― チンチラ ―

野生のチンチラは、南米アンデス山脈の標高3000メートル以上の高いところに住んでいます。細かくてやわらかい毛がたくさんはえていて、その密度はほにゅう類で１番だとか。そのため、暑さには弱いけど、寒さにはとても強いです。テンジクネズミやカピバラと同じ南米出身のネズミの仲間で、親のミニチュアのような毛の生えそろった赤ちゃんを産みます。

子ども動物園では、お母さんとこども１頭が見られます。とても活動的ですが、巣箱にかくれていることも多く、食事時間の11時ごろが、動き回る姿を見るチャンス！　また、冬のあいだは、コンタクトコーナーに登場することもあるそうです。ふわっふわの毛とふれあえるかもしれませんよ。

⑥仲むつまじい夫婦の代名詞
― オシドリ ―

オシドリは仲良し夫婦と昔から言われています。そう思っていらっしゃるアナタ！オシドリの実態を…。

カップルは仲良く連れ立って泳ぎ、水場近く、時には大木の10メートル以上の高さにある洞穴などに営巣することもあります。そしてメスが卵（7～12個）を産むと夫婦を解消！　メスのみで約1ヶ月の抱卵、子育てをします。そして通常翌年には、べつの相手とつがいになります。

繁殖期（冬）のオスのなんと美しいこと！　特に目立つのはイチョウの葉の形をした羽根。メスは暗褐色～黒褐色の体で、眼のまわりに白のリングの、すっきりとした姿。食べ物は草の種子、果実、水生昆虫など。お好みはドングリです。当園にはオシドリ夫婦１組と、アメリカオシのオス１羽がいます。冬は美しい姿が見られるチャンスです。

★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦静かなる"森の人"
― オランウータン ―

東南アジアのボルネオ島とスマトラ島にすむ大型類人猿。その名はマレー語で"森の人"を意味し、熱帯雨林の20～50mの木の上で、群れを作らず単独か親子連れで暮らし、地上にはめったに下りません。ドリアンなどの果実が大好き。木の葉や樹皮、昆虫なども食べます。おとなになると強いオスだけが顔のまわりのほほのひだが張り出し、のど袋も発達して大きく立派な顔になりますが、性格はおだやか、おおらか。　腕が脚の倍くらい長く、手先が器用で握力が強く、つかむのが上手ですが歩くのは苦手です。

当園にはオスのフトシとメスのナナがいます。フトシはおっとり型・人なつこい性格、人を観察するのが趣味、ナナは恥ずかしがり屋、あまり下に降りてこないので、上の方を探して下さい。

野生では非常に高い所にいるために間近に見ることはむずかしい動物ですが、当園ではすぐ近くでご覧になれます。お見逃しなく。

第１８号　（２０１４年春）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の

ボランティアがえらんだ 見どころ7

セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

①元気いっぱい「まい」と「みい」
― レッサーパンダ ―

レッサーパンダはもともと中国の山に住んでいるので、日本の夏の暑さがとってもニガテ。だから夏は冷房のきいたお部屋の中に入りがち。でも去年生まれた**まい**と**みい**は暑さなんておかまいなしにと～っても元気。外にいるときも部屋の中にいるときも、ぐるぐるかけまわったり、木の橋を渡ったりしています。

でも体はちゃんと暑さに反応し、「冬用の長い毛はいらないよ～」と、毛がポロポロと抜けて、見る時期によってはかなり毛並みが悪く見えます。「病気じゃないの？」と心配してくださる人もいますが、大丈夫、元気いっぱいです。**まい**と**みい**の見分け方は獣舎の貼り紙を見てね！

②アリを食べる。ほかのものも食べる。
― ミナミコアリクイ ―

夜行性動物展示室のうす暗がりを、黒い服を着た白いぬいぐるみのような姿でスタスタ歩き回るミナミコアリクイ。その名のとおりアリを食べるので、歯はなく、あごも発達していません。野生では、前足の長くするどいツメでアリ塚をこわし、１㎝くらいしか開かない口から細長い舌を出してアリをなめとります。

当園では、缶詰のドッグフードやヨーグルトやバナナなどをミキサーにかけて混ぜたものを与えていますが、アボカドやオレンジも、切って置いておくとツメでくずして上手になめ取って食べます。南アメリカの北部から東部に生息しています。

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイドをしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

③中華？それともドラゴンボール？
― ミニブタ ―

子ども動物園にはミニブタ（ポットベリー種）が４頭います。名前は、**チャーシュー**（オス）、**チャオス**（餃子・メス）の２頭とその子どもたち**マーボー**（オス）と**ナルト**（メス）です。ミニブタは、ベトナムが原産地。皮膚が人間に近いため、医学の研究用に利用されていますが、性格はおとなしくてきれい好き。うんちは決まったところにしかしません。また、小型であることから、最近ではペットとして人気があります。人間に良く馴れ、メスの２頭は「おすわり・お手・回れ」などができます。オスはキバがあるため、柵の中にいますが、メスの２頭はヤギとヒツジの広場でさわることができます。ぜひさわってみてください。

④世界一大きな鳥
― ダチョウ ―

草原ゾーンの丘を、飛べない鳥のダチョウたちが歩きまわっています。当園には、黒っぽいオスが１羽、炭褐色のメスが２羽います。

大きくて怖そうだけど、意外と人なつっこいところも。姿を見かけたら、ちょっと立ち止まって観察してみて下さい。こちらに興味を持ったメスが、口をぱくぱく、羽をパタパタさせてあいさつしてくれるかも？　そして、オスがしゃがみこんで首を左右にふりながら、羽を交互にパタつかせたら…　それは、彼からのプロポーズです❤　魅力を感じたら、人にも求愛してくれるそうですよ～♪

⑤名前はサギでもトキの仲間
―アフリカヘラサギ―

その名の通り、ヘラ型のユニークなくちばしが目を引きます。白い羽毛に赤い顔、美しい鳥です。アフリカ、マダガスカルの川、湖、湿地などに大きな群れで生息しています。

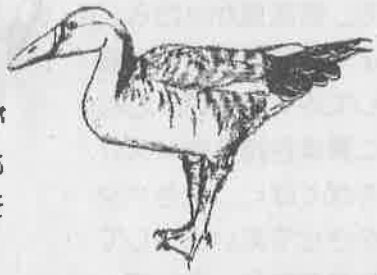
水辺に棲むかれらは水中に入れたくちばしを左右に振って歩き、触れたエサを捕って食べます。当園ではアジ、ワカサギ、オキアミなどを与えています。独特の食事の様子をぜひごらんください。マーブル模様の卵を2～3個産み、夫婦交代で1か月ほどあたため、ヒナは成長とともに顔、脚などが赤くなってきます。

当園では同じ場所にショウジョウトキ、ヒロハシサギがいっしょにいますが、体の大きいアフリカヘラサギが勢力があるのか、まっ先にエサを食べ始めます。

⑥日本ではめったに見られない渡り鳥
― サカツラガン ―

アジアスイギュウの池にいるチョコレート色の水鳥は、サカツラガンのカップルです。アジアに生息する渡り鳥で、日本にはめったに飛んできませんが、アジアスイギュウとは同郷の仲。当園では、たがいにつかず離れず、平和に池をシェアしています。

子ども動物園にいるシナガチョウの祖先ですから、見くらべてくださいね。中国で3千年くらい前に、この鳥の羽根の一部を切って飛べなくしているうち、飛べないガチョウができあがりました。ガチョウのほうが一回り大きいですが、茶色い羽根はいっしょです。



当園の2羽は、オスがメスに首ったけ。いつもいそいそと、メスの後をついて歩きます。

★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦日本の山にすんでいます
― ホンドザル ―

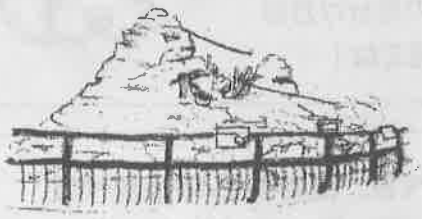
ホンドザルはニホンザルの一種で、日本の本土にいるからホンドザル。ちなみに屋久島にいるのはヤクザルです。ほかのサルにくらべて寒さに強いのですが、ここのホンドザルは雪がニガテ。今年2月の大雪のときは、いつもはすぐに無くなるエサも、雪の上のものはいつまでも残ったままでした。

さて、次のサルの順番は何を示しているでしょう？

マーモセット、ホンドザル、テナガザル、オランウータン、ゴリラ、チンパンジー。

実はこれ、サルから人に進化していく順番を示しています。だからこの中で一番人に近いのがチンパンジー。ホンドザルは結構遠かったんですね。

この園ではこの6種をすべて展示しています。当園はサルの種類がとても豊富で、日本の動物園で2番目くらいに多い種類を飼育しています。



動物公園のサル山

園内には約360本のソメイヨシノがありますが、ほかにもカンヒザクラ（レッサーパンダそば）オオカンザクラ（モウコウマそば）キョイコウ（トナカイそば）など花の咲く木がいっぱいです。お花見、どうぞ。

動物科学館1階
夜行性動物の展示室は昼と夜が逆転しています。
昼の1時前後が「真夜中」で活動的。
暗くて「おばけやしき」みたいだけど、大声を出さないでくださいね。

第１９号　（２０１４年夏）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7

ボランティアがえらんだ

セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

①動物一のノッポさん
― アミメキリン ―

キリンは首も脚も長くて、動物の中で一番の長身。長い首を器用に動かすことができ、後ろに曲げることもできます。おまけに視力も良いので、遠くもよく見えて危険を早く見つけられるため、生息地のアフリカでは、キリンのまわりにはシマウマたちが安心して群れているのが見られます。

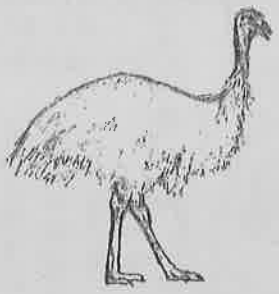
歩き方は独特で、ゆっくり歩くときは同じ側の前と後ろの脚を同時に動かし、走るときは後ろ脚をそろえて蹴るように走ります。すわるときは長い前脚を折って地面につけます。

アミメキリンの**サツキ**は、当園生まれのメスで 16 歳。あみめ模様がとてもきれいで、ちょっと用心深い性格です。エサやりの時間には近くでごらんになれますから、長い舌や長いまつ毛を見てくださいね。

②オーストラリアを代表する鳥
― エミュー ―

鳥類水系ゾーンにいる当園のエミューは、2003年生まれのカップルで、お昼どきには仲良くエサを食べる姿がすぐ近くで見られます。

オスとメスはほぼ同じ外見ですが、メスはボンボンと鳴くのでわかるそうです。メスは12月～2月ごろ、濃い緑色の大きなアボカドのような卵を産みます。大きくて飛べない鳥ですが、長い頑丈な足で長距離を歩き回り、時速 40km くらいで走ることもできます。



また、エミューは「前進しかしない動物」という理由から、オーストラリアの国章にカンガルーとともに描かれています。けっして後戻りせず、前へ前へと歩むエミューの勇姿をぜひ見に来てください。

③家族みんなで子育て中
― フサオマキザル ―

動物公園のフサオマキザルは一家７頭の大家族。一番の見どころは５月４日に産まれた赤ちゃんです。どれが赤ちゃんか分かるかな？　群れの中では一番小さく、お母さんのオッパイを飲んでいるか、お父さんやお兄さんの背中にしがみついています。

５頭も子どもがいるので、お父さんはビッグダディー。子育てにも超積極的です。お兄さんたちも赤ちゃんの世話をよくします。だからお母さんは安心ですね。

実はこのフサオマキザル、子育てに協力的なのは元々の習性。野生では群れで協力して他人の子も自分の子も関係なく世話します。

なんだか理想的ですね。私たち人間も見習いたいです。

④ニワトリのご先祖
― セキショクヤケイ ―

家畜原種ゾーンのトナカイの向かい側にいる、セキショクヤケイ。中国南部や東南アジアに生息する野生の鳥で、おなじみのニワトリの原種と言われています。ニワトリよりも少し小さく、ニワトリよりは飛ぶのが上手。警戒心が強く、人に馴れにくいそうです。

オスは、赤いトサカに金色、青紫色、赤褐色などの羽根が美しい模様を織りなしていて、全体ににぶい金属的なツヤがあり、フサフサとした尾羽も優美です。同じ野生の美しい鳥でも、子ども動物園にいるコンゴウインコの極彩色とはまたちがった豪華さがあります。

当園では現在オスだけを飼育していますが、メスはオスより小柄で地味な色をしています。

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイドをしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

⑤ヒツジのご先祖
― ムフロン ―

5月に、2頭のムフロンの赤ちゃんが生まれました。ふたごではなく、2頭のお母さんから同じ日に生まれたオスとメスの仔ムフロン。そして、6月にもオスが誕生。みんなきょうだいみたいに仲よしですが、おっぱいは、ちゃんと自分のおかあさんからもらいます。

ムフロンは、地中海の島々に生息するウシ科の動物で、ヒツジの祖先と言われています。家畜のヒツジは毛が伸び続けるので、初夏に人間が刈りとりますが、ムフロンは、自然に冬毛が抜けて、夏はスッキリした短毛に。

メスにはツノはないか、あっても小さくしか生えませんが、オスはツノが一生伸び続けますから、通常ツノの長いほうが年上です。今年生まれたオスも、すでにちょっとだけツノが見えていますが、いずれ立派なうずまきのツノを持つ、おとなのオスになるでしょう。

仔ムフロン

⑥古くからの人間の友
― シバヤギ ―

子ども動物園では、シバヤギ17頭を飼育しています。シバヤギは、漢字で書くと「柴山羊」。柴犬と同じく、柴とは小型という意味だそうです。ヤギは世界で約300種ありますが、シバヤギは長崎県西海岸や五島列島などで古くから飼育されている日本の在来種です。

ヤギの家畜化は犬に次いで古いと言われており、粗食によく耐え、けわしい地形も苦としません。そのような強じんな性質から、山間部や乾燥地帯で生活する人々にとって貴重な家畜となっています。

当園では、今年3月24日に2頭の子ヤギが誕生しました。男の子が**ピック**、女の子が**クミン**です。今がやんちゃな盛り、ヤギとヒツジの広場で皆さんをお待ちしています。

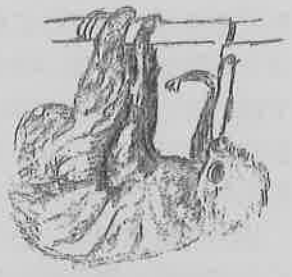
★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦なまけているわけじゃないけれど
― ナマケモノ ―

かわいそうな名前のついたこの動物。英語ではなんと呼ばれているのでしょう？

「sloth（スロース）」という名前がついています。これはやっぱり「なまける」という意味。ガーン(+_+)！南アメリカのジャングルで木にぶら下がり、1日の大半を眠って過ごすナマケモノって、だれが見ても怠け者？



でもナマケモノもナマケモノなりに、一生懸命生きています。木の葉・果実を探して食べ、うんちやおしっこをするために地面までわざわざ降りて行ったりもします。動作はゆっくりで、おしっこもたまにしか出ませんけどね。じつはナマケモノは、ほんの少し食べれば生きていけるように進化してきたのです。

動物科学館バードホールのフタユビナマケモノは、午後のスコールの時間（午後2時40分ごろ）が見どころです。目をさましてエサのキャベツやバナナを取りに行く姿が見られるかも。

第２０号　（2014～2015 年冬）
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7

ボランティアがえらんだ

セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

①小さいのは子ども？　いいえ、メスです
― マンドリル ―

「ライオンキング」でもおなじみのカラフルなサルと言ったら…マンドリル！　ですがあのあざやかな色を持つのはオスだけ。アフリカのうす暗いジャングルの中でもくっきりと目立ちます。メスは地味で体がずっと小さく、オスとメスとの体格差はサル類では最大です。野生では複数のオスと複数のメスが群れで暮らしています。

当園のオスのヨタロウ(20 才)は大きな体に大きな頭、見事な色彩の顔やお尻はボスの風格満載ですが、力関係はというと、モモ(16 才メス)＞ヨタロウ＞ウメ(8 才メス)の順番。飼育係が近寄ったり、食べ物が出てくるとそれがよくわかりますよ。観察してみてください。

②川や田んぼにもどってきてほしい
― ドジョウ ―

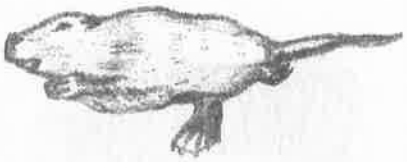
ドジョウの日本固有種は９種類あります。漢字で「泥鰌（泥のマス）」と書くように、田んぼや池に棲んでおり、冬は泥の中で冬眠しています。雑食性で、ミジンコやイトミミズなどの小動物や、アオミドロなどの藻類などを食べていますが、くさったものもよく食べるので、掃除屋と呼ばれます。口の周りに 3～6 対のひげを持ち、食物を探すのに使います。えらで呼吸するほか、にごった水でも生きられるよう皮膚呼吸や腸で空気呼吸を行うこともでき、水中の酸素が不足すると水面まで上がってきて空気を吸います。

昔は田んぼなどでよく見かけましたが、今では見る機会も減ってしましいました。子ども動物園内の飼育センターにいるので、変態のある姿をぜひごらんください。

★ボランティアが毎月第2、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイドをしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

③泳ぎが上手なネズミの仲間
― アメリカビーバー ―

野生のアメリカビーバーは、北アメリカ（アラスカからフロリダまで）の水辺に家族で棲んでいます。泳ぎが得意で、水かきのついた後ろ足と大きく平べったいボートのパドルのようなしっぽを使って上手に泳ぎます。前足は、体にピタッとくっつけて泳いでますよ。水中では鼻と耳を閉じることができ、物をくわえて泳いでも口の中に水が入らないようになっているそうです。



当園では、オスのグループ（2 頭）とメスのグループ（3 頭）が順番に皆さんの前に出ています。夜行性なので、午後なるべく遅い時間のほうが活発に動く様子が見られます。前足で器用にエサを持って食べる姿や、水の中をスイスイと泳ぐ姿、運が良ければ木をかじるところも見られるかもしれません。

④美しい羽根と　大きな声
― アカミミコンゴウインコ ―

動物科学館のバードホールでひときわ大きな声をひびかせているのはアカミミコンゴウインコ。1 階の止まり木にいる 1 羽がインコ特有の声で「ギャーッ」と叫ぶと、上の方からもう 1 羽が「ギャッ、ギャーッ」と応じ、なにか話し合っているみたいです。

子ども動物園にいるルリコンゴウインコやベニコンゴウインコなどよりもひとまわり小さい、中型のインコで、ボリビア中部の標高 1100～3000m の峡谷や森などに生息していますが、生息地域は狭く、絶滅危惧種になっています。

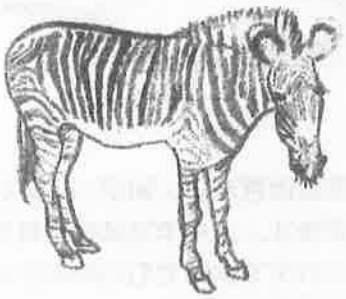
当園でのエサはヒマワリの種とくだもの、野菜。「アカミミ」とはいうものの、ひたいの赤いもようのほうが印象的ですが、たしかに耳のあたりもよく見れば赤くなっています。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑤よく見れば　個性がキラリ
― グレビーシマウマ ―

グレビーシマウマは、縞のキメが細かな美しいシマウマです。丸みを帯びた大きな耳がピンとしているときは、まわりの音をよく聴いている証拠。ところでシマウマはどのような鳴き声かご存じですか。メスはあまり鳴きませんが、オスは「ヒィーッ」と大きな声で鳴き、それはウマよりもロバの鳴き声に似ています。

グレビーシマウマは絶滅危惧種に指定され、国内には19頭しかいません。そのうち3頭がここ千葉市動物公園にいます。同じように見えるこの3頭、よく見るともようが違います。たとえば、**カエデ**は左目の近くにホクロがあります。このようにして1頭1頭の特徴をみつけるのも、動物園の楽しみのひとつではないでしょうか。



⑥鋭い聴覚で獲物をねらうハンター
―カラフトフクロウ―

まん丸の顔が特徴のカラフトフクロウは、遠くの音もよく聞こえる耳を持っています。お菓子のバウムクーヘンのようなもようの顔は、羽が重なり合っていて、まるでパラボラアンテナのように音を集める働きをします。これを使って、雪の下を動く小動物の音を聞きとり、つかまえることができるそうです。ふわふわな羽のおかげで大きな体に見えますが、実は意外に小さいのだとか。

一般にフクロウは夜行性なのですが、カラフトフクロウは日中も夜間も活動します。寝ているように見えても、実際は、うす目を開けて、こちらの様子をうかがっているのかもしれませんよ。

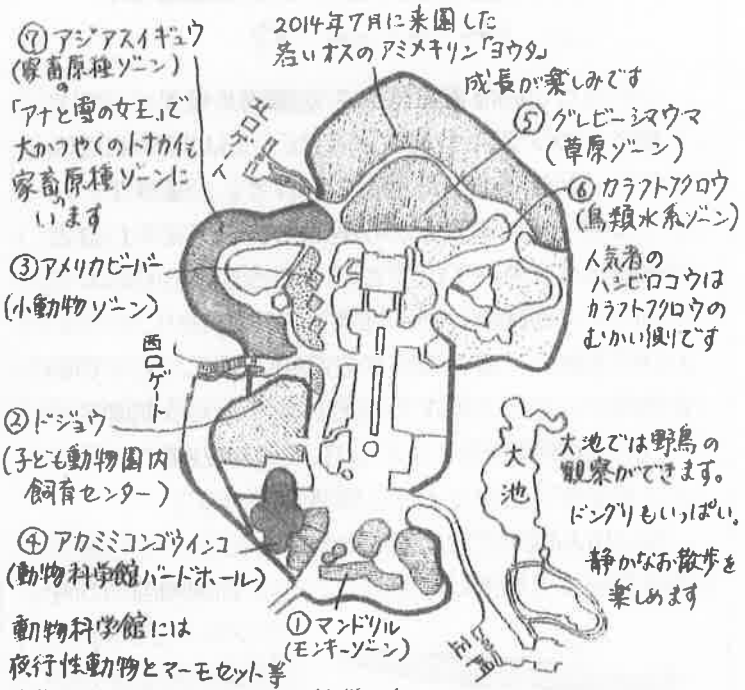
★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきこえたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

⑦水は得意だけど　泳いのは苦手
― アジアスイギュウ ―

スイギュウには、アジアスイギュウとアフリカスイギュウとがあり、ツノの形がちがいます。アジアスイギュウのツノは頭の両脇から背中の方に向かってカーブをえがく三日月型。アフリカスイギュウのツノはあたまの上に2本がくっついて生え、両脇にたれ下がってから上を向いています。

アジアスイギュウ

アジアスイギュウは古くから家畜化され、世界各地で農耕や荷物運びなどに使われたり、肉、乳、革、ツノなどが利用されています。野生のものはネパール、インド、ブータンなどにわずかにいると見られ、絶滅危惧種です。

アフリカスイギュウ

当園のアジアスイギュウはメスのモームス。夏はよく池に入りますが、冬は足の先だけ水につけて、入ろうかどうしようか、迷っているように見えることがあります。